

# ヒンドゥー巡礼空間における女性修行者の日常生活

## ——「母」として生きること——

平成 20 年入学

参加したフィールドスクール：ネパールフィールドスクール

調査地：インド

濱谷 真理子

キーワード：巡礼空間、現世放棄、女性、ケア、母性

### 1. 自分の研究テーマについて

本研究の目的は、インド・ネパールに広がるヒンドゥー世界の巡礼空間をフィールドとして、そこで暮らす「マター」（母）と呼ばれる女性修行者たちの生のありようを、民族誌記述を通して明らかにすることにある。

従来の巡礼研究では、多くが巡礼をリミナルな「聖なる旅」とみなし、世俗/聖性、あるいはゲスト/ホストとして分ける視点から巡礼過程や人びとの関係性を捉えてきたため、巡礼者（よそ者）でもあり住民でもあるような、あいまいな領域を生きる人びとが捨象されてきた。本研究では、巡礼を生きる過程の一環として捉えなおし、巡礼のなかで生きる場を「巡礼空間」という概念で表したうえで、そのようなあいまいな領域を生きる人びと、すなわち「巡礼を生きる」人びとの日常に着目する。中でも、現世放棄（サンニャーサ）を中心とする修行制度を社会文化的背景として展開してきたインド・ヒンドゥー世界の巡礼空間を具体的なフィールドとする。

また、これまでの現世放棄研究では、男性修行者の世間からの隠遁や苦行実践など「苦行」的側面に注目が集まり、マイノリティである女性修行者の日常には十分に光が当てられてこなかった。それに対し、本研究では、女性修行者の日常生活におけるさまざまな気遣いや世話など、ケアの世界に着目し、関係性のなかで母性及び「母」として生きる自己がいかにして創出されるのかを考えていきたい。



写真 1：サブジを調理中の修行者

### 2. フィールドスクールから得られた知見について

これまで、私は NGO などの社会活動に対して、どこか馴染みにくいような、ある種の距離感を感じていた。しかし、今回のフィールドスクールで、さまざまな活動家・実務家にあい、話を聞くことができたのは、私にとって非常に有意義な経験であり、彼らの人柄や活動の一端をうかがい知ることで、距離感が少し解消された。

改善すべき点としては、第一に移動が多く、かつ毎日細かに予定が組まれていたので、後半には肉体的・精神的にかなりの疲労を感じた。もう少し、参加者の気力や体力、時間的余裕を考慮した日程調整が望ましい。また、国内のあちこちを転々とするのも見識が広まってよいが、一週間前後という限られた期間設定を考えれば、どこかに定点を置き、座学・演習の方向性を定めたいと、より現地の人びと

や社会活動をする人びとの関係性や日常生活に近づこうとするほうが、研究と実務双方の面で理解が深まるのではないかとおもう。

### 3. フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

ヒンドゥー巡礼空間は、インド・ネパール両方にまたがるものである。そこでは、サードゥやサンニャーシンと呼ばれる修行者たちが行き来するだけでなく、特にインドの巡礼地では、ポーターやホテルの客引きなどの出稼ぎにやってきたネパール人の姿が多く見受けられる。今回のフィールドスクールやその前後のネパール・カトマンズの調査において、実際に出稼ぎに行っていた、出稼ぎ中という人びとから話を聞き、現状の一端をうかがうことができた。今後の研究では、北インド・ウッタラーカンドの巡礼空間において、出稼ぎネパール人やネパール人修行者がどのように社会的に位置づけられており、ネパール人同士、または地域住民とどのような関係性を築いているのか、考察していくことを射程に含めたい。また、いずれは、ムクティナートなどネパール・ヒマラヤの巡礼地にも、研究のフィールドを広げていくつもりである。



写真2：ネパーリー・バーバたちと私



写真3：ウッタラーカンド州の風景